

芳一異聞 作品《芳一-物語と研究》への覚え書き

兵庫県立美術館で『関西の80年代』展に、私たちはインスタレーション作品《芳一-物語と研究》を展示しました。この作品は他の展示作品と比べ少し異なるところがあります。ここでは、あらためてその異質性について書いておくことにします。1987年当時、私たちが作品制作を通して何を問題とし、何を試みようとしていたのかを少しでも顕在化できればと思います。

作品空間を彷徨こと ——体験と装置

御覧になられた方はご存じかと思いますが、作品《芳一》は、部屋全体が一つの構造物として組み立てられています。またこの作品を構成する個々の要素——立ち並ぶ鏡、螺旋状に設置された屏風とその上に連なる言葉群——それらは、絵画や彫刻、オブジェなどのように観客が目を凝らして見るような「鑑賞」の対象、それ自体が自立した美的対象ではありません。

作品《芳一》は、その全体を一望の元に見渡すことはできず、観客自身の歩みによって、全体の姿が徐々に明らかになっていくようなかたち（構造）を持っています。立ち並ぶ鏡の領域ではリアルな空間と鏡像の虚構の空間が重なり合い、さらに渦巻き状の屏風の中に歩み入ると裏面に書かれた経文が現れます。初めて訪れた町をさ迷う時のように、ここでは新たに現れる光景を期待しながら歩くという体験自体、体験という時間的な推移に焦点が当てられています。

当時、このような作品のあり方を言い表す言葉として「装置」という言葉を使っていました。その後90年代からの所謂「メディア・アート」の到来を予感させる言葉ですが、当時は静的なイメージを持つ「美術作品」という言葉を一旦保留し、棚に上げる言葉として用いていました。そこでは、観客は「装置」を操作する者ではなく、その「装置」に巻き込まれる者となります。

物語の登場人物としての観客、読者としての観客

作品《芳一》では、観客が作品空間を歩きまわる体験を軸にしつつ、その観客に一つの役割、立ち位置を与えています。それはラフカディオ・ハーンの怪談「耳無し芳一」の一つの場面を背景としたものです。琵琶法師、芳一の身体に経文が書き込まれ、平家の亡霊はその姿を見つけることができません。「芳一、芳一…」と何度も呼びかけながら亡霊は彼の姿を追い求めます。この亡霊の動きと重なり合うように、観客は鏡や屏風に書かれた「芳一」という言葉や、それに続く「あなたは、どこにいるの？」に始まる一連の言葉を読み進めながら、次第に作品内部へと誘い込まれます。

観客は物語「耳無し芳一」の亡霊の位置を与えられつつ、同時にそのこと自体を振り

返り俯瞰することになります。それは物語を読み進める読者にとっても似ている立ち位置かもしれません。

誰か（他者）に語られることと私

観客の作品空間内への歩行やそれへの意味づけは、私たちのインスタレーション作品の当時のスタイル（文体）でした。しかし、作品《芳一》の核とも言うべき、私たちが作品を通して考えたかったこと、それは「物語ること」自体への問いかけでした。

物語「耳無し芳一」の中で、平家の亡霊が芳一を求めるのは、芳一に自分の滅びの物語を語って欲しいからに他なりません。亡霊は、琵琶法師である芳一によって「平家物語」が何度も語り直されることを求めています。語られることがなければ亡霊であることさえも叶わない。それは「誰かに語られることによって始めて存在する<私>」という考えにも結び付きます。

既に失われた出来事もまた、語られることによって始めて「出来事」として私たちの前に出来します。それは、ある特定の時間かぎりで解体されることになるインスタレーションという「出来事」を暗示するものでもあったように思います。

安藤泰彦(KOSUGI+ANDO)